子宮がん ― 検診の大切さ ―

子宮がんは、子宮の入り口の子宮頸（けい）部という部位に発生する「子宮頸がん」と、子宮内膜がんと呼ばれ、赤ちゃんを育てる子宮内部の内膜に発生する「子宮体がん」があります。

子宮は、下腹部の中央に西洋梨を逆さにしたような形で中は空洞、外部とは膣につながった状態で存在します。子宮がんは、約20～30年くらい前では子宮頸がんが90％くらいでしたが、近年、食生活の西欧化などにより子宮体がんと子宮頸がんが同じぐらいの発生割合となっています。

子宮頸がんの原因はＨＰＶ（ヒトパピローマウイルス）感染が90％と言われ、日本では年間９０００人近くの人がかかり、２７００人もの人が亡くなっている病気です。これは、10日に1人が亡くなっている計算です。性行為が若年化したことより20～30歳代の若い女性がかかり、女性のがんの中で乳がんに次いで多い病気です。

１９８０年代にハウゼン博士がＨＰＶを発見して、ワクチンの開発が行われました。ワクチンを接種することで子宮頸がんの90％が予防されているという報告があります。

子宮頸がんの検査は、子宮の入り口（頸部）の細胞をこすって取る細胞診とＨＰＶ検査があります。細胞診による検査は、性行為があれば20歳代から2年に1回することが推奨されています。しかし、日本は年間24％の女性しか受診しておらず、受診率80～90％の他の先進国に比べ受診率が低い国となっています。

症状は、初期は無症状ですが、進行してくるとおりものの増加・性器出血などが起こります。初期で発見すると円錐切除といって子宮を残して子宮頸部を切るだけの手術で済み、その後の妊娠も可能です。しかし、進行した場合には子宮をすべて取り、抗がん剤・放射線治療が必要になり、妊娠ができなくなってしまいます。

近年は、20歳代の人のかかる率が上昇し、妊娠ができる年齢で子宮を取ってしまうという、大変不幸な結果となる人が増えています。

子宮体がんは、毎年約６０００人が発病し主に閉経付近（50歳くらい）にかかる病気でしたが、現在は40歳以下にも増えています。原因は、肥満・高血圧・糖尿病などで、予防のためには普段の食生活に注意が必要と言われています。

検査は子宮内の細胞診・組織診です。子宮体がんの症状として一般的におりものの増加・月経不順・性器出血が起こります。初期に発見されるとホルモン治療で治りますが、進んでくると子宮をすべて取り、抗がん剤の治療が必要となります。

子宮体がんの早期発見には、おりものが増え月経不順を感じた時点での受診が必要です。

つまり、子宮がんは、初期に発見することが大切です。若いうちから検診を受けることをすすめます。

ひさまつ産婦人科医院
久松（ひさまつ） 和寛（かずひろ） 先生

佐伯地区医師会

ホームページ　http://saikima.jp/

佐伯地区医師会は、廿日市市・江田島市で開業または勤務している医師で構成されている地区医師会です。日本医師会や広島県医師会と協力しながら、地域に密着した医師会として約30万人の地域住民の健康を守るため、学校医、産業医、健診、救急医療、在宅医療などさまざまな仕事をしています。